2013年
12月18日
水曜日

ジョン・ウェスレーと「お金の遣い方」

●退任教授最終チャペル講話／春井久志　教授（国際金融論）

聖句『ルカによる福音書』第16章9節
讃美歌11番「あめつちにまさる…」

1．はじめに

関西学院大学経済学部の教員として経済学部のチャペルで講話をする最後の機会を与えられ、心より感謝いたします。関西学院はキリスト主義をその教育理念としています。本学はイギリス国教会の牧師、ジョン・ウェズリー（John Wesley, 1703－91年；日本ではウェスレーとも発音されています）が18世紀に始めた信仰復興運動が「メソディズム」に発展し、アメリカでは今もプロテスタントの三大教派の一つに数えられています。関西学院もこのアメリカのメソディスト教会が1886年に神戸の地に設立した神戸栄光教会の初代牧師であるウォルター・ランバス（1854－1921年）が1889年に原田の森（現在の神戸市灘区）に設立したことに起源を発します。

2．ウェスレーの説教：「お金の遣い方」

J・ウェスレーが生まれ育ち、メソディスト信仰復興運動を展開した18世紀のイギリスは「困難な時代」であり、人びとの生活も過酷なものでした。イギリス国教会は人々の心に霊感を与え、生命を吹き込む力をすでに失っていました。また、この時代には世界で初めて「産業革命」が誕生し、イギリスの経済社会が大きな構造変化を遂げつつありました。それは21世紀初頭の現在のように「急激な変化」の時代でもありました。ウェスレーはイギリスを生命に溢れた信仰へと呼び戻すことに成功しました。このために「ジョン・ウェスレーの信仰復興運動は、フランス社会を分裂させた1789年のフランス革命のような血なまぐさい革命からイギリスを救済した」とさえ言われることがあります。

このウェスレーがお金の遣い方に関する説教を残していますので、今日はそれを紹介してみようと思います。彼がその説教のためにテキストに選んだ聖句が『ルカによる福音書』第16章の後半です。

（1）金銭欲

ウェスレーは「世の中では、金銭欲がすべての悪の根源だということが言われているが、決してお金それ自体があくではないのだ。それが悪の根源となる時、その責任はお金にあるのではなく、お金を遣う人間の側にあるのだ」とはっきり言っている。

お金は最善の事のために遣うこともできるし、同時に最悪の事のために遣うこともできます。それは、そのお金をどう遣うか、その人間の生き方、考え方によって左右されます。たとえばそのお金は飢えた人びとの食べ物になり、渇いた人々の飲み物になります。また旅人や寄留者に安らぎの場を与えることができ、寡婦の夫の代わりもでき、父なし子の父にもなれます。このようにお金は正しく遣われれば、非常に大きな役割を果たすことができます。

（2）3つの原則

ウェスレーはお金の遣い方として、3つの原則を勧告しています。

①「できるかぎり利得しなさい（Earn as much as you can）」
②「できるかぎり貯蓄しなさい（Save as much as you can）」
③「できるかぎり与えなさい（Give as much as you can）」

ウェスレーは、お金儲けは否定していないし、それどころか大いに推奨している。しかしそのお金儲けの方法については、注意深い説教をしている。つまり、「できるかぎり利得する方法」に条件を付けている。たとえば、①自分の生命や健康を犠牲にしてまで金銭を利得してはならない。②自分の心や魂を失ってまで利得してはならない。③隣人に害を与えることなしに、また④隣人の身体や⑤魂を損なうことにより利得してはならない。「正しい勤労」によって利得することを奨めている。言い換えれば、道徳性と正義を伴う利得の方法である。

「できるかぎり貯蓄せよ」は、利得したものを無益な消費に用いてはならないこと、それが貴重なタラントンを地中に埋めることは、タラントンを海に投げ捨てることに等しいを言う。食べ物や服飾、装身具、高価な家具、人びとの賞賛を手に入れるために、さらに子供たちのために美味しい食事や高価な服装など贅沢なものを与えて、金銭を浪費してはならない、と言う。子供たちに遺産を無駄に残してはならないと言う。子供たちが困窮しないで生活できるものを与え、残りすべてを神の栄光のために用いるべきであると言う。

さらに浪費しなかった金銭を銀行に預金したり、金庫にしまい込み利用しないことは、金銭を海に投げ捨てることに等しい。「不正の富を用いてでも、自分のために友達を作る」（ルカ16－9）ためには、第3の原則を第1と第2の原則に加えなければならない、つまり「できるかぎり与え」なければならないと説く。

3．禁欲的プロテスタンティズムの役割

（1）「所有の世俗化作用」

中世の修道院では、禁欲的生活態度が定着すると、経済的合理主義が形成され、そこには富が蓄積されます。

ところが、富が蓄積されると、禁欲的規律を切り崩すか、あるいは非生産的目的への富の使用が始まる。マックス・ウェーバー〔Max Weber、（**1864年4月21日－1920年6月14日**）〕は、**ドイツの社会学者・経済学者**。マックス・ウェーバーと表記されることもある。正式な名前はカール・エミール・マクスィミリアン・

ヴェーバー（Karl Emil Maximilian Weber）マックスはマクスィミリアンの省略形である）、はこれを**「所有の世俗化作用」**と呼んでいる。こうした事態に対して再び修道院改革が行われて、禁欲的規律が強化されます。修道院の歴史は、この過程の繰り返しであったと言われている。

（2）メソディスト運動

大きく言えば18世紀のメソディスト運動は、かつての修道院改革のように、この「所有の世俗化作用」を阻止する禁欲運動であり、メソディスト運動にも、この一連の循環が認められる。そこでウェスレーは、信仰の指導者として次のように勧告している。

われわれはすべてのキリスト者に、できるかぎり利得するとともに、できるかぎり節約すること、すなわち、結果において富裕になることを勧めなければならない。…（中略）私たちの富が、私たちを地獄の底へ沈めないようにするには、なにか方法をとることができるでしょうか。それにはただ1つの方法があり、それ以外の方法はこの地上にはありません。『できるかぎり利得し（Earn as much as you can）、『できるかぎり節約する（Save as much as you can）』人びとが、同時に『できるかぎり与える（Give as much as you can）』ならば、彼は利得すればするほど恩恵を増し加えられ、またそれは天国に宝を蓄えることになるでしょう。

（3）M・ウェーバーの説教の引用

彼の主な業績は、西欧近代の文明を他の文明から区別する根本的な原則を、「合理性」と仮定し、その発展の系譜を「現世の呪術からの解放（die Entzauberung der Welt）」と捉え、比較宗教社会学の手法で明らかにしようとした。そうした研究のスタートが記念碑的な論文である**『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』**（1904年―1905年）であり、西洋近代の資本主義を発展させた原動力を、主としてカルヴィニズムにおける宗教倫理から産み出された世俗内禁欲と生活合理化であるとした。この論文は大きな反響と論争を引き起こすことになったが、特に当時の**マルクス主義**における、宗教は上部構造であって下部構造である経済に規定されるという唯物論への反証としての意義があった。

彼はその主著のなかでウェスレーの説教を引用しているが、その引用文とウェスレーの説教とでは、全体の論調が異なることが指摘できる。ウェーバーの引用文は以下の通りである。

わ・れ・わ・れ・は・す・べ・て・の・キ・リ・ス・ト・者・に・、・で・き・る・か・ぎ・り・節・約・す・る・こ・と・を・勧・め・ね・ば・な・ら・な・い・。・が・、・こ・れ・は・、・結・果・に・お・い・て・、・富・裕・になること・を意味する。（これに続いて「できるかぎり利得するとともに、できるかぎり節約する」者はまた恩恵を増し加えられて天国に宝を積むために、「できるかぎり他に与え」なければならない、という勧告がなされている）。

以上の引用文の比較から明らかなように、ウェスレーが勧めたのは、利得し、節約して得た富を、富裕にならないためにすべて与えなさい、ということであった。ウェスレーが激しい反語の意味を込めたこの重要な一文を、ウェーバーは、一見ウェスレーが富裕になることを勧めているかのように引用し、そこで文章を打ち切っている、と安藤（1977）は指摘する。

ウェーバーは脚注において、読者にウェズリーのこの文章の一読を勧めていますが、対比してみるとウェーバーの引用文とウェズリーの原典では、全体の論調が違うことがはっきりします。しかもウェーバーは「これまで述べてきたこと全体の標語としてふさわしいもの」としてわざわざ傍点まで降った部分が原典と違っているのです。ウェズリーの勧めたのは、利得し、節約して得た富を、富裕にならないためにすべて施しなさい、ということでした3。

問題は、この変更がウェーバーの論旨全体の中でどのような意味を持つのか、という点である。ウェスレーの考えでは、富それ自体は神からの恵みであるとし、**「金銀が責められるべきであるというのでしょうか。そうではありません。金銀に過ちはありません。それを用いる者にあるのです」**と述べている。しかしウェスレーの考えでは、一見して「富める者」と判断される人々は、明らかにすでに富の用い方を誤り、現世の欲望にとらえられていることになる。それは、富の正しい用い方をしていれば、決して「富める者」にはならないからです。

ウェスレーが厳しく勧告し続けたにもかかわらず、――というよりはそうしなければならなかったほど――メソディストたちの現実は勧告通りには行っていなかったのが実情であった。ウェスレーも、富に関する説教を**「正しく理解し、その危険を十分わきまえている人はキリスト者の中でも極めて少なく、それを実際の生活に適用している人に至っては皆無に等しいほどです」**、と認めている。

（4）近代的企業経営者と労働者の形成

「利得」と「節約」をメソディストたちに実践させた原動力は宗教に独自の強力な内発的エネルギーにあり、信仰的昂揚が続く限りはこれらの勧告はすべて実践される。しかしそれは同時に、生活態度の合理化作用をもたらした。ところがこの信仰的昂揚が純粋性を保つのは、ふつうはごく短期間であって、それはまもなく合理化された生活態度を残して、純粋な信仰のみに基礎をもつ「施し」や「与える」ことなどとともに消え去ってしまう。これが近代的企業家の形成過程の一面であった。

他方、企業経営を構成する労働者の間にも、禁欲的プロテスタンティズムは使命としての職業労働という観念を植え付け、「資本主義の精神」を企業家とともに担うようになった。信仰的昂揚から醒めた企業家が、その職業生活における祝福を利潤に求めていったのと同じように、いったん禁欲的生活態度の洗礼を受けた労働者も――勤労意欲を保持したまま――その祝福を賃金に見るようになりました。信仰的良心のゆえに劣悪な労働条件を耐え忍ぶ態度が、宗教上の熱狂とともに消えゆくとき、そこに残されたのが新たな労働者のエートスでした。かくして、勤労大衆も資本主義の精神の担い手となった、とされています。

4. おわりに

ウェスレーが「お金の遣い方」という説教をメソディストの信徒たちに残しているという事実は、第1と第2の原則を守り抜いた優れた信徒といえども、第3の原則を守ることがいかに難しいことであるかを知り抜いていたという現実を直視していたからに他ならない、と考えられる。それ程に、第3の原則を実行することは困難なことである。しかしウェスレーは、ウェーバーと異なり、富裕になることで満足してしまわないことで、大いに異なっている点は注目に値する。私たちは、一人ひとりに与えられた富＝タラントンを地中に埋めることなく、大きく育て、活かして、できるかぎりそれを奉仕のために遣うこと、他の人々のために「与えること」に努めることを期待されているのである。

参考文献

安藤英治編（1977）『ウェーバー　プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』、有斐閣新書。

マックス・ウェーバー著／梶山 力・大塚久雄訳（1989）『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』、岩波文庫。

1　Wilson Engel (ed.) "John Wesley: Revival and Revolution" (Special Commemorative Issue), *Christian History Magazine*, Christian History Institute, 1983.

2　梶山・大塚訳（1991）353ページ。なお、傍点は原著のまま。

3　安藤編（1977）185-6ページ。

4　安藤編（1977）190-2ページ。